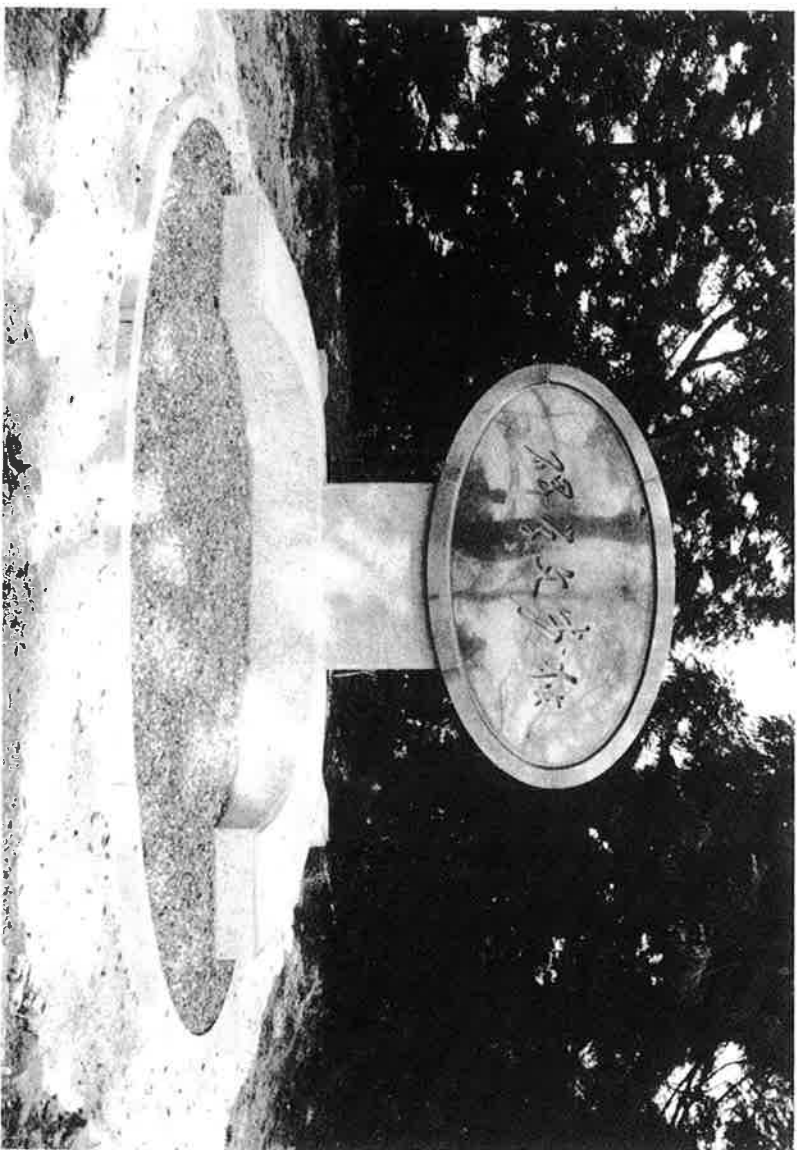


独歩文学碑建設の経過

- 昭五五・一・一五 佐伯史談会は、特別事業計画の一として、城山山頂に「春の鳥」の一節を刻む独歩文学碑建設を決定し、建設委員を選任した。
- 昭五五・六 委員会は計画を進めたが、羽柴事務局長が多忙のため健康を害し、病氣入院し回復がおくれたため工事決定がおくれた。
- 昭五六・一・二一 佐伯史談会は役員会で、独歩会と協力して建設すること、予算を増額して規模を拡大することを決定した。
- 同 ・七・二〇 独歩文学碑建設についての趣意書を作成、広く一般の協力を呼びかける。
- 同 ・八・二五 OBSテレビ放送を通じ、両会長出演して独歩文学碑建設を広く紹介する。
- 同 ・一〇・六 建設実行委員会を結成、大口寄付による予想外の資金調達めどがついたため、当初の計画を変更、設計を梓設計社長清田文永氏に依頼することに決定。
- 同 ・一〇・二〇 佐伯市歴史的環境保存調査中の京大西川グループの意見をきく。
- 同 ・一・一 上旬 設計者清田文永氏病氣入院、回復が遅れる。一時小康を得たが五七年六月逝去。このため設計がおくれる。
- 昭五七・一・末 佐伯市特別補助金（安藤賢氏寄贈）百万円を受領。
- 同 ・三・一七 設計上の調査資料として、城山登山道の搬石難所の写真に解説を加えて梓設計に送る。
- 同 ・四・二七 梓設計より代表者三名来佐、実行委員会、工事担当者参加で現地調査を行い、社長の設計主旨と設計図により、それぞれ検討を加え、概略の成案を得る。
- 同 ・六・一八 実行委員会は、訂正設計に対する工事価格を工事担当者と折衝。
- 同 ・六・二九 地鎮祭を挙行する。
- 同 ・七・二五 梓設計より、工事者提出の工費についてネゴシエーションを終わった回答を得る。
- 同 ・八・二七 梓設計より碑陰銘文のチェックとレイアウトの図面着。
- 同 ・九・一八 工事了了、実行委員会立会承認
- 同 ・九・三〇 除幕式挙行



城山山頂にできた独歩文学碑

昭和57年9月30日除幕
菅田義雄 写



碑 陰

清田義雄 写

碑陰の文

佐伯と国木田独歩

文豪国木田独歩は、矢野龍溪、徳富蘇峰の推挙で、毛利高範旧藩主が創建した鶴谷学館の教師として赴任した。佐伯在任はわずか一年足らずであつたが、彼ほど佐伯の山野を深く愛し、遍く歩き、広く天下に紹介した作家は他にない。源おぢ、春の鳥、鹿狩、小春、忘れ得ぬ人々、豊後の国佐伯、欺かざるの記などの名作は、湖畔詩人ワーズワースの詩境と佐伯の自然とを結んだからこそ生れた独歩と独得の文学作品である。傑作春の鳥ゆかりの城山に此の碑を建てて独歩文学発祥の記念とする。

佐伯史談会

佐伯独歩会

設計主旨

私にとって、作家独歩は「自然」への求道者と銘じている。求道者の意は、自然への愛着や没入が、自己表現に於て、自然への憎悪や拒否と相克し——限りなく矛盾的自己同一的に昇華した、この作家の生きざまを看る故である。その故に、作家独歩のイメージが、形態として焦点を結像するのは、楕円——決して一つではなく、二つの点を結んで軌跡の合理する楕円形である。

私はその終焉の日まで、懈むことなく続けられたあの相克を——独歩の世界の全てを、その軌跡の中に封じていると考える。

清田文永

基金協力者 安藤賢外二百六十五名

撰文并書 東階 狩生熊義

刻石 榎大洋石材 梶川 洋

昭和五十七年八月